

## 弟を殺そうとした兄たち

[聖書]創世記 37章1～24節

ヤコブは、父がかつて滞在していたカナン地方に住んでいた。ヤコブの家族の由来は次のとおりである。ヨセフは十七歳のとき、兄たちと羊の群れを飼っていた。まだ若く、父の側女ビルハやジルバの子供たちと一緒にいた。ヨセフは兄たちのことを父に告げ口した。イスラエル（ヤコブ）は、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった。兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。ヨセフは夢を見て、それを兄たちに語ったので、彼らはますます憎むようになった。ヨセフは言った。「聞いてください。わたしはこんな夢を見ました。畑でわたしが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました。」兄たちはヨセフに言った。「なに、お前が我々の王になると言うのか。お前が我々を支配するというのか。」兄たちは夢とその言葉のために、ヨセフをますます憎んだ。ヨセフはまた別の夢を見て、それを兄たちに話した。「わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです。」今度は兄たちだけでなく、父にも話した。父はヨセフを叱って言った。「一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか。」兄たちはヨセフをねたんだが、父はこのことを心に留めた。兄たちが出かけて行き、シケムで父の羊の群れを飼っていたとき、イスラエルはヨセフに言った。「兄さんたちはシケムで羊を飼っているはずだ。お前を彼らのところへやりたいのだが。」「はい、分かりました」とヨセフが答えると、更にこう言った。「では、早速出かけて、兄さんたちが元気にやっているか、羊の群れも無事か見届けて、様子を知らせてくれないか。」父はヨセフをヘブロン谷から送り出した。ヨセフがシケムに着き、野原をさまよっていると、一人の人に出会った。その人はヨセフに尋ねた。「何を探しているのかね。」「兄たちを探しているのです。どこで羊の群れを飼っているか教えてください。」ヨセフがこう言うと、その人は答えた。「もうここをたってしまった。ドタンへ行こう、と言っていたのを聞いたが。」ヨセフは兄たちの後を追って行き、ドタンで一行を見つけた。兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフを殺してしまおうとたくらみ、相談した。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えばよい。あれの夢がどうなるか、見てやろう。」ルベンはこれを聞いて、ヨセフを彼らの手から助け出そうとして、言った。「命まで取るのはよそう。」ルベンは続けて言った。「血を流してはならない。荒れ野のこの穴に投げ入れよう。手を下してはならない。」ルベンは、ヨセフを彼らの手から助け出して、父のもとへ帰したかったのである。ヨセフがやって来ると、兄たちはヨセフが着ていた着物、裾の長い晴れ着をはぎ取り、彼を捕らえて、穴に投げ込んだ。その穴は空で水はなかった。

### [序] ヤコブの親・兄弟関係

族長物語の三代目ヤコブは自分の家族、親や兄とどのような関わりをもって生きたのでしょうか。両親のイサクとリベカは三国一の花婿・花嫁でした。イサクは親切で身惜しみしない働き者のリベカを心から愛して、彼女が子供を生むことを、20年間も祈り続けて待ちました。ところがこの二人は、

双子の兄エサウをイサクが、弟のヤコブをリベカが偏愛したことが原因で、次第に会話を交わさない夫婦になってしまったようです。

年老いて目が見えなくなったイサクがエサウに家督を譲ろうとした時、リベカはヤコブをエサウに変装させて、祝福の祈りを横取りさせてしまいます。出し抜かれたエサウはヤコブを殺そうとします。こうして4人家族はばらばらになり、家庭が崩壊してしまいました。ヤコブは自分を偏愛する母の指図に従って父を騙し、家庭崩壊の一翼を担ってしまったのです。

家を離れて20年、ヤコブは伯父の家にも居れなくなり、カナンに戻ることにになりました。自分を殺そうと息巻いたエソウと再会しなければなりません。家族もろとも殺されるのではないかと非常に恐れられました。騙された者の呪い、復讐への怯え、騙したことへの自責の念で彼の心は闇に閉ざされ、動けなくなってしまいました。彼は必死に神さまにむしゃぶりついて助けを求めます。そしてやっと覚悟を決めて兄の前にひれ伏しました。兄は快く和解してくれました。

こうして私たちは、ヤコブの親との関係、そして兄との関係を見てきました。親の偏愛が兄弟に深刻な確執をもたらし、苦しめたのです。ところがこのような苦い経験を嫌というほど味わったヤコブが、自分の息子たちに対して、同じ愚かな過ちを繰り返しているのです。一体どうしたことでしょうか。

### [1]偏愛が子を失う

彼はエサウから逃れて、母の兄ラバンの家に身を寄せました。ラバンには二人の娘がいました。姉のレアは優しい目をしていました。妹のラケルは顔も美しく、容姿も優れていました。ヤコブはラケルを恋しました。7年働けば結婚させてやると言われて、懸命に働きました。ところが結婚式当夜になって、妹を姉より先に結婚させるわけにはいかないと言われて、レアとラケル姉妹と一緒に妻にすることになりました。そして更に7年間働くことになりました。

レアは男の子を6人生みましたが、ラケルには子が出来ません。彼女は自分の召使いビルハを側女として差出し、ヤコブの息子を2人生ませます。するとレアも対抗して自分の召使いジルパを側女に差出して、ヤコブの息子を2人生ませました。こうして10人の息子が誕生した後で、ラケルはやっと待望の男の子を出産します。それが後にエジプトの総理大臣に出世したヨセフです。

ヤコブは90才位になっていたのではないのでしょうか。最愛のラケルが生んだ息子ヨセフをどの息子よりも可愛がり、彼だけに裾の長い晴れ着を着せます。17歳になっても、10人の兄たちのように遠くの野に出て羊の群れの世話をさせずに、せいぜい家の近くどまりにして、手許に留まらせていました。兄たちはこれを見て、次第にヨセフを憎むようになります。そしてヨセフという名を聞くだけで腹が立ち、穏やかに話が出来なくなってしまいました。

ところがヨセフはこのような兄たちの心に、火に油を注ぐようなことを二度も繰り返したのです。自分が見た不思議な夢を兄たちに語って聞かせたのでした。「聞いてください。私はこんな夢を見まし

た。畑で束を結わえていると、いきなり私の束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると兄さんたちの束が周りに集まって来て、私の束にひれ伏しました」。兄たちはヨセフに言いました。「なに、お前が我々の王になるというのか。お前が我々を支配するというのか」。

ヨセフはまた別の夢を見て、兄たちに話しました。「太陽と月と11の星が私にひれ伏しているのです」。今度は兄たちだけでなく、父にも話したので、ヤコブは彼を叱りました。「一体どういうことだ、お前の見たその夢は。私もお母さんも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか」。兄たちはますますヨセフを憎み、また嫉みました。しかし父親のヤコブはこの夢を心に留めました。

このように兄たちのヨセフに対する心情が大変険悪になっていたにも拘らず、ヤコブは遠くの野原で羊を飼っている兄たちの所に、ヨセフを使いに出したのです。ヨセフも平気で出かけて行きました。人に尋ねたずねて家から約100キロ離れた所で、兄たちを見つけました。はるか遠くにヨセフの姿を認めた兄たちは、彼を殺す相談をします。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えよ。あれの夢がどうなるか、みてやろう」。

さすがに長男のルベンはそこまでやるのに反対しました。「命まで取るのはよそう。血を流してはならない。荒れ野のこの穴に投げ入れよう。手を下してはならない」。そこで兄たちはヨセフがやって来ると、着ていた裾の長い晴れ着をはぎ取り、彼を空井戸の穴に投げ込みました。ルベンは後で彼を助け出して、父の許に帰す積りだったのです。

兄たちが食事をしていると、エジプトへ行く商人の一行がやって来るのが見えました。「そうだ、奴をあのだ隊商に売り飛ばそう」。穴の所に行くと、ヨセフは穴の中に居ませんでした。別の商人たちが彼を見つけ、穴から引き出し、エジプト行き商人たちに既に売り飛ばしていたのでした。兄たちは仕方なく最初の計画通り、ヨセフの晴れ着を雄山羊の血に浸して、父親の許に送り届けました。

「これを見つけましたが、あなたの息子の着物かどうか、お調べください」。「あの子の着物だ。野獣に食われたのだ。ああ、ヨセフはかみ裂かれてしまったのだ」。ヤコブは自分の衣を引き裂き、幾日も嘆き悲しみ、誰からの慰めも受け付けませんでした。ヤコブがエジプトで40才になったヨセフと再会するのは、彼が130才になってからです。20数年間ヨセフを死んだものと思い込んで過ごすことになります。

## [2]後から書き綴られた本

それにしましても、親の偏愛が兄弟の間に深刻な確執を引き起こして、家庭を崩壊させてしまう苦い経験をしたヤコブが、またどうして同じ愚かさを繰り返したのでしょうか。年寄り子というものは、それほど可愛くて、親を盲目にしてしまうものなのでしょうか。「親が若い時に生んだ息子は、たくましくて心強い」(詩 127:4)と詩編に歌われています。どの子もそれぞれに大事なのです。親がこれ

では、兄弟たちもたまりません。ヨセフ憎さが頂点に達している兄たちが、家から遠く離れた野原で羊の世話をしている所へ、わざわざヨセフを使いに出すなど、殺されにいくようなものです。それが分からないとは、父親失格ではありませんか。

ヨセフもヨセフです。父親から特別扱いをされて兄たちの憎しみを買っている自分が分からないのでしょうか。その彼らの心を更に逆なでする夢を二度も語って聞かせています。そして平気で遠くの野に居る兄たちの所に、のこのこと出向いて行きました。人の気持ちにまるっきり鈍感過ぎます。

去年安倍前首相が政権を投げ出した時に、気持ち(K)が読めない(Y)人間という言葉が、マスコミで流行語になりました。場の雰囲気や相手の気持ちが読めないKYと言えば、まさにヤコブやヨセフがKY そのものではないでしょうか。この2人がもう少し周りの者たちへの気配りをしていたら、このような悲劇は起こらずに済んだはずです。ではどうしてこのような人物が 聖書の主人公として、登場するのでしょうか。

或る人が「聖書は後から書き綴られた本だ」と言いました。ヨセフが荒野で隊商に捕まり、エジプトに売り飛ばされてしまいました。ところがそれがきっかけで、神の民イスラエルとエジプトとが結びつき、世界的な大飢饉の中で彼らはエジプトに避難することが出来たのでした。そして後にモーセを指導者にエジプトを脱出して、約束の地カナンに戻ってくる出エジプトという、神さまの大きな救いの御業のドラマの下地が整ったのでした。

私たちは人生の先が見えない人間です。何故こんな不幸が自分に起こるのか、何故こんな目に遭わなければならないのかと、日常に起こる願わしくない出来事を嘆き、神を呪いさえしてしまいます。しかし後になって、あそうか、この事のためにあの事が起こったのか、あの経験があったらこそ、今日のこの恵みを頂けたのだと感謝することが度々あるのです。人生の物語は後になってから書き綴ると、話の筋が通るものなのですね。

ヤコブはエジプトの地で12人の息子皆に囲まれて、一人ひとりを祝福しながら、148才の生涯を安らかに閉じました。その後でヨセフは兄さんたちにこう語っています。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」(50:20)。

そうです。ヤコブは愚かさ故に、偏愛の罪を犯しました。兄たちも殺意を抱いてヨセフを空井戸の中に投げ込む大きな罪を犯しました。しかし神さまはその悪を善に変えて、ヤコブと兄たちばかりでなく、更に多くの民の命を救うために、一人ひとりの行いをお用いになったのでした。何と有難い神さまでしょうか。

## [結]大らかに生きる

私の人生を導いて下さる神さまが、私たちの愚かさや悪を善に変えて下さるお方だと信じるなら

ば、私たちはもう少しゆったりと人生を生きていくことが出来るのではないのでしょうか。確かにどの子供も公平に愛して育てることは大切でしょう。相手の気持ちをもっと思いやり、いたわりながら一緒に生きていくことも大事でしょう。でも一つ一つを完璧にしなければと考えると、息がつまってしまいませんか。

あのヤコブやヨセフでも、神さまは守って、導いてくださいました。だから愚かでも大丈夫なのです。自分に対してばかりでなく、周りの人の愚かさをも大らかに受けとめて、一緒に生きていくことが、大切ではないのでしょうか。日常のこまごました事に、一喜一憂しないことです。

神さまの目はいつも、多くの民の命を救うことに注がれています。多くの人に豊かな祝福が届くように、私たち一人ひとりを、悪を善に変えてお使い下さっているのです。その神さまに自分の一切をお委ねして、生きて参りましょう。

完